書簡集に表われたヘッセ像

藤　井　啓　行

ここで扱おうとするのは，Hermann Hesse : *Gesammelte Briefe,* erster Band, 1895—1921, Suhrkamp Verlag, 1973 である．この書簡集については，筆者自身が最近すでに一度，阪神ドイツ文学会編『ドイツ文学論攷』XIX（1977）の「紹介」欄で取り上げたのだが，そこでは頁数の制限のため，内容の詳細にわたって具体的に述べることまでは極めて困難であった．勿論それはそれで完結したものになっていることは言うまでもないが，ただ筆者としては，ヘッセに対して多少とも関心を懐く者にとっては甚だ興味深いと思われるこの書簡集の内容を，いま少し深く立ち入って紹介したいという気持が抑えがたくなった．そこでこの場を借りて責めを果たそうというのが拙文の趣意であるわけだが，それも無駄なことではない筈である．従ってここでは，前記紹介との内容上の重複を避けるのは無論のことだが，いずれにせよこの書簡集の内容をとおして，ヘッセの従来あまり一般に知られていないと考えられる面に焦点を合わせ，上記年代におけるヘッセ像に近付いてみたいと思う．ついでながら，当初は，ヘッセの生誕100年記念日にあたる1977年7月2日までに刊行の予定であった *Gesammelte Briefe* の2・3巻は，その予定が遅れて同年秋の現時点でも未刊だが，それだけに編集の困難さと編者の周到な配慮の程が推測されようというものである．

チュービンゲンの書店員時代のヘッセが，或る時期ニーチェの作品に没頭していたことは世人の知るところだが，ヘッセはニーチェのどこに力点を置いて読み耽ったのであろうか．実はヘッセは，ニーチェの高貴な美的表現が殊のほか気に入り，極めて力強い言語を駆使したその天才的な詩的表現を，何にも増して高く評価していたのであった．ニーチェの思想の魅力も，この光彩陸離たる表現に伴われなければ，当時20歳前後の唯美主義者であったヘッセの心をよく捉え得なかったことであろう．その頃 Calw にいる両親に宛てた手紙によると，ヘッセはずっと以前から，芸術（文学）の存在理由は道徳的な意味においてよい効果をあげることにはなく，手段としての芸術は せいぜい中途半端で 不完全な芸術に 過ぎないという ことを，確信していたらしい．また女流作家で友人でもあった Helene Voigt-Diederichs に送った文面から見ても，当時ヘッセが美的な文体の彫琢に心を砕き所謂 l'art pour l'art を偏愛していたことは，まず間違いがない．このあたりに新浪漫主義の風潮の反映も顕著で，当時のヘッセが単なる観念や思想の世界よりも美的表現のほうに遙かに強く心を引き付けられていたことは，見逃せないと考えられる．だからこそまた，18世紀の牧歌詩人や，イタリアの優雅な好色文学や，フランスのゴンクール兄弟の文体の人工的芸術性などが大きな魅力を持つ対象となり得たのである．しかしまた反面，内実を伴わぬ文体の装飾は単なる虚飾に過ぎないこともヘッセはよく心得ていた．彼がノヴァーリスをドイツ近代文学の中で最も高貴な詩人と見たのも，ノヴァーリスがそのような気取りとは全く無縁の芸術家で，その言葉には真の Geist がこもっていると考えたからに他ならない．

他方また当時のヘッセが音楽に余りにも強く心を奪われていたことも，紛れもない事実である．少々誇張して言えば，音楽は若い彼が無条件で陶酔しうる唯一不可欠の芸術であった．そしてその中でも，彼はどれほどショパンの音楽に熱中していたことか．これは余りよくは知られていない事実でなかろうか．ヴァーグナー信奉者時代のニーチェにおけるヴァーグナ

ーの存在以上の意味を，その頃のヘッセにとってはショパンが持っていたのである．この音楽は，ヘッセの生活における精神面・心情面のあらゆる本質的なものと深くかかわっていた．ではショパンにおいて，ヘッセの琴線にとりわけ強く触れたものはいったい何であったか．それは温かい生き生きとした旋律であり，ぴりぴりと鋭くて淫らとも言えるような神経質な和音であり，つまりは青年ヘッセの感受性にとって比類なく親密な音楽の世界なのであった．そしてまたこのようなヘッセだからこそ，殊にショパンをよくするピアニストでもあった女性 Maria(のちの，ヘッセの最初の夫人）にも愛を懐いたのであろうが，しかしまたその結婚生活にも後年，遠からず破局が訪れたのは，このショパンによって代表される音楽が内蔵する危険性を象徴する出来事のようにも思われてくる．

総じて女性に対し，殊に若き日のヘッセは母に向かってのような求めかたをしたとよく言われ，年長の Maria との関係にもそれが見られるように推測できるが，それでは現実の母はヘッセにとってどのような存在であったのだろうか．その事情をヘッセ自身の手紙の中に求めれば，作品に対して母が与えてくれる批評の言葉は，20歳の彼にとっては他のどのような評価よりも遙かに重要であり，母の直観的な論評と優れた眼識に対して，彼は常に畏敬の気持を懐き続けた．そしてこのような敬愛の念は，1902年に彼が25歳で母が死んだ時も変らず，ヘッセは母が今なお精神的には自分の眼前にいるのだという実感に心を励まされた．彼はしばしば母の存在と愛を，生前よりも更に強く覚えるのであった．しかもその気持は翌年になっても失せることなく，ヘッセは母を，自分の身辺に幾度となく生々しく感じると述べている．

ヘッセの生涯を考える上で，女性問題は余り明らかでないものの一つだが，20歳の彼が Helene Voigt-Diederichs に宛てた手紙から見る限り，女性とのつきあいは彼にとっても どうしても 無くては ならない ものであり，それは常に特別な意味を持っているのであった．チュービンゲン時代

の，かなりの数にのぼる彼女宛のヘッセの書簡にも，同性の友人の間に認められるような深い友情の証しが漲りつつ，そこにはまた，相手が女性なるが故の，ヘッセのすっかり打ち解けた甘やかな心の傾斜がよく看取されるのである．

ところでヘッセは先述のノヴァーリスを浪漫主義者として特に熱愛したが，当時の，またその後を通じてのヘッセにとってドイツ浪漫主義は，ひめやかで若々しいドイツ的心情のすべてをその中に持っていた．またそれは，現代にはまず見られなくなってしまった青春の独創的な思索への憧れなのであり，ノヴァーリスこそはまさにその旗頭であった．永遠なるものの声に対する畏敬，内的生命の奏でる調べにひたすら傾聴すること，また魂の隠れた源を住処とすること，それらこそが，ノヴァーリスを代表とする浪漫的心情の告白の基盤をなすものであった．

今これを宗教的観点に移し考えた場合，ヘッセの魂が敬虔主義の土壌に培われたことが知られているが，彼にとってキリスト教の信仰は単なる形式でも比喩でもなく，真に生きた強い力なのであった．他のどんな力も，キリスト教におけるような意味で神聖な共同体と愛とを作り保つことは出来ない．チュービンゲン時代の彼が既にこのように考えていたことは注目してよいが，この考えかたは本質的には，生涯を通じてヘッセの宗教観の根幹をなしていたと言えるように思う．のちの1910年に父に宛てた手紙によっても，ヘッセ自身の生活は世俗的なものであるが，真の敬虔さに対してはヘッセは深い尊敬の気持を懐き，また彼が対立したのはキリスト教の教会にであって，キリスト教の信仰に対してでは決してなかったことが知られるのである．このような彼の心のありかたをその作品の中に跡付けるのは，誰にとっても極めて容易なことであるに違いない．

1902年の初頭，バーゼルの書店員時代のヘッセは Carl Busse に宛てて，自分は余りにも南国的に生まれ過ぎたと述べている．このような彼だからこそ，強烈な暑さや寒さ，また力強い鮮やな色彩や澄明な光を愛する

のであり，のちの第1次大戦中に彼が，すばらしく豊かで，美しい彩りに溢れた南 Tessin に寄せた熱い想いや郷愁も，われわれにとってよく共感されるのである．

ヘッセは自然における色彩の魔術的な躍動に心を奪われる．彼は友情を喜び恋を求めるが，その他の人間関係は彼にとって煩わしいばかりであり，その心はひたすら自然に向かっていた．彼がとりわけ親愛の情を覚えるのは山，川，谷，海，空や，また雲，花，木，そして動物たちである．それらの世界の中での自由な放浪やボート漕ぎ，また水泳や魚釣り，これこそヘッセにとって最上のもので，しかも彼はそれらをスポーツとして行なうのでなく，一人の夢想家として伸び伸びとただ楽しむことを何にも増して好むのであった．他方それに反してヘッセは，拘束的にはたらきかけて来るものをすべて極度に忌避する．従って人との交際は最小限度にとどめ，自由に振舞える保証がない場合の社交は，可能な限り退けてしまう．こうしてヘッセの悲願は，日常的に煩わしいことのみ多い社交的な，また更には文学的な世界からも逃れ消えて，誰にも気付かれず，ただ一人で静かに，心のおもむくままさすらいの喜びをかみしめ，晴れやかな心で美しい国々を歩き回れるだけの金をいつか持ちたいということであった．

音楽がヘッセにとって不可欠のものであったことは既に記したとおりだが，卓越した人格との個別的な深い交友は別として，当時の彼にとって一般に音楽家とのつきあいは，文学者・俳優・教授・学生などとのそれと同様，どうも嫌でたまらない程のものであったらしい．また *Peter Camenzind* 執筆の26歳の時に到っても，Stefan Zweig 宛の文面から見る限り，文学は彼にとって殆んど本当の喜びを与えないのだと言う．

だが芸術こそはヘッセの生命であり，そしてあらゆる芸術の中で，創作の才能については文筆において最も恵まれていると自ら考えた彼は，出来ればその文筆によってこそ一本立ちをしたいと早くから一途に願ってきたことも，また事実であった．そのような彼にとって，世俗の職業は，彼が

心を励まして懸命に勤めれば勤めるほど，ますますその相対的な価値の低さが明らかなものとなっていく．それは全く辛いことであったに違いない．だからこそ，1904年に本屋の仕事から永久に離れて作家生活にはいりうるようになった時のヘッセの満足は，それこそ例えようもないほど大きかった筈である．それでは前述の，文学が彼に喜びを殆んど与えないというのは，このことと矛盾するのであろうか．私はそうは思わない．文学の創作の仕事は彼に大きな生き甲斐を感じさせるが，現実に小説を書くのは常に苦しい作業なのである．（ついでながら，演劇は彼の体質に余り向かないものであったらしい．）

ヘッセはツヴァイクに対するまた別の手紙の中で，自分が Dichter でなくMalerであったらどんなに素晴らしい絵が描けるだろうかと何度も考えた，と述べている．外界の色調の美に対する心の傾きのますます強まってきていることが看取されるが，その思いが募っても，実際に彼自身の絵となって次々と開花するのは，しかし後年のことである．その後年の単純化された構図の絵に示される，清々しい明るさの中に描き出されたヘッセの詩心の，晴朗な伸びやかさに私たちは心打たれるのだが，今は外界の風物は，将来の奔出に備えるためのように専ら内に取り入れて積み上げられていく．のちに絵を実際に描き始めるようになった頃の彼の詩 *Magie der Farben* や *Malerfreude*, 更にまた短いメルヘン *Piktors Verwandlungen* などは，殊に彼の詩心に照応する絵の特質を眼前に彷彿させるが，それ以前の時期のヘッセの手紙にも，美しい色彩とのたわむれの恍惚感については随処に触れられているのである．

南国の多彩な世界に心を牽かれるヘッセにも，ままならぬのはその健康状態であった．彼は極く若い時から周期的に起こる持病の頭痛に苦しんでいた．また25歳の時の手紙には既に，これまた持続的な眼病のことが記されているし，作家としての初期の活動期にあたる Gaienhofen 時代において早々と，肉体的には病気がち，また精神的にも，その多くは家庭的な

要因に基づく極めて不安定な情況に追いこまれたことが述べられている．そしてひどい時には，病み疲れた頭と目とに辛うじて残されている余力も，文筆の仕事に対しては殆んど用をなさない状態になっていたという．もちろん心身の快調が喜びをこめて報じられる時もあるが，その好調もやがて程なく消えていくことが度重なるだけに，それは殊のほか貴重な時と言ってよいのである．上記の頭痛と眼病は，第1次世界大戦勃発の頃には更に悪化の様相を呈していたが，これらの悪条件が重なったことが，やがてヘッセを強度のノイローゼに追いこみ，またその内省的な傾向に拍車をかけたことは否定できないように考えられる．

ところで1904年出版の *Peter Camenzind* によってヘッセの文名が一度にあがったことは周知のところだが，彼自身は同年暮れの手紙の中で，この作品の「途方もない」成功を自分は喜んでいるのではない，と記している．つまり文字どおり流行作家になったことを，彼は決して望んでいないわけだ．実はそれから2年経過したのちにおいても，ヘッセはまた更めて，このような形で有名になるのはむしろ悲しむべきことで，事の本質からすれば頗るくだらないと言っているのである．これはジャーナリズムに対する彼の不信感とも照応するものであり，このことから，ひいてはおよそ事大主義的な所謂 politisch なものへの彼の嫌悪もまた理解できようというものである．悪しきジャーナリズムは，当時のヘッセには既にして，その思考の怠惰と非良心性が耐えがたい存在であったのだし，また世に謂う所の Politik の世界は，ともすれば徒らな大言壮語や空疎な絶叫，また低次元の策略や駆け引きの暗躍する場ともなりがちなものとして，もとより本当の意味でヘッセの関心の対象とはなり得ないたちのものであった．このことは大戦直前の時点においても基本的にはあくまで変らず，1912年のその書簡に徴しても，彼はやはり政治の世界には馴染んでいない．狭いながらも確固とした世界に両足を着けて，日々の生活を慎しく送っていく名も無い庶民（たとえば徒弟の若者とか若い女の売子など）の生活の実際

のほうにこそ，ヘッセの関心は向けられていたのである．

さて先にも少し触れた家庭生活の面に関して言えば，ヘッセの本性には実は流浪の民のジプシー的な所もあって，それが彼をして安定した定住の境地に容易に浸り切らせない．特に若年の時の彼が，結婚生活には自分は素質的にまるで向いていないなどと頻りに述べているのは，このこととともかなりに関係があるに違いない．だが最初の夫人との不幸な結婚生活にあっても，その間に生まれた3人の息子たちに対するヘッセの愛情は強く，この子供たちが彼にとって，殆んど唯一の完全に純粋な慰めであり喜びなのだと思われることがよくあった．それだけではない．恵みの神が微笑み，子供たちも，また神経症の妻も打ちそろって元気であるような時は，彼は心から嬉しさに浸っているのであって，そこではヘッセの人間としての優しさを充分に窺い知ることが可能である．だが結論的にはやはり，この生活の破局はいかにしても避けることが出来ない．その意味で，たとえば1912年5月ヘッセが或る友人に送った書面は深刻で，そこには或る日を好まない理由として，それと同じ日に彼がかつて今の夫人と婚約し，その記憶とどうしても繋がって不快になるのだという事情が述べられている．そして生活が今ほどひどく荒廃したことは，これまでに滅多に無かったと言っているのである．

家庭における不安感が募っていく中にあって，ヘッセの心の底では，自分が das Menschliche と感じるものを表現するのが何よりも重要なことだという考えが，次第に大きく広がっていく．ガイエンホーフェン時代からベルン時代への歳月の経過のうちに，ヘッセは人間的にも文学的にも自分の前に新しい道が漸次開けつつあるのを予感し，彼の心には，自分はこれまでの，世間の寵遇を受けさせてくれた „Unterhaltungsroman“ とは無縁の存在になるべきだという思いが熟していくのであった．そして大戦直前の彼は，今後の仕事のありかたに関して，自分が今や黙ってすっかり筆を絶つというのでない限り，これまでとは違った全く新しいことを手

懸けるべき時期に来ているように思い，そのための端緒や予感は既に自分の中にあるのだと，明らかに宣言するに到っている．それはつまり，本物の体験に根ざした芸術の要請を真剣に受けとめ，高次の現実性の構築に進んで与りたいという願いであった．そしてこの願いが，大戦勃発を直接の契機とするヘッセのいわゆる転身の，大きな伏線となったことは言うまでもないであろう．

ところで大戦前のヘッセの文学について，ここで僅かに視点をずらし更に極く少しだけ付け加えて言っておくとすれば，従来そこにしばしば彼の故郷の匂いを強く嗅ぎつけるのは，多くの読者の好んでしたところであった．それも道理ではあって，何よりも彼自身がまた，自分は生粋のSchwarzwälder だと言い，幼年時代の Schwarzwald は自分にとって他の何にも替えがたい神聖な土地であるといった趣旨のことを，幾度となく語っているのである．だが他方またヘッセが実感をこめて，自分は世間に迎えられたいくつかの小説によって，世に謂う所の郷土作家だと多くの人々に受け取られているが，本当はその反対の存在であって，自分は安住できる故郷をこれまでについぞ持ったことがないのだと述べていることも，同時に考え合せてみる必要がある．彼には事実つねに幾許かの流浪性と故郷喪失が伴奏音のように付きまとっており，だからこそ彼はフランスの友人 Romain Rolland に向かって，その主人公が最後には故郷に帰ってきはするものの本質的には放浪者小説と言うべき自分の作品 *Knulp* を，「私の兄弟」と呼んでいるのであろう．1903年に久し振りで数ケ月のあいだ，故あって生まれ故郷のカルフに帰っていたヘッセは，この土地にこそ自分が長年にわたって求めてきた環境，つまり完全な静寂と孤独が見いだされると記した．また，自分はまだ小さい子供の時スイスのバーゼルにも何年か住んでいたことがあるが，しかしやはりカルフこそ幼い時分の真の故郷と言ってよいだろう，ここは美しい所だと，感に耐えぬように述べているのも，またいかにも事実ではある．だがそれでも彼はこの故郷なるものに，

そののち定住はおろか，決して束縛されようともしなかったではないか．

1914年に始まった大戦がヘッセにとって文字どおり生涯の決定的な転機になったことは，ヘッセ読者の常識のとおりである．この戦争で最初ヘッセの心が最も苦しんだのは，これまで正しいとしてきた普遍的な精神価値を事も無げに蹂躙してしまうその野蛮さについてであった．しかもまた戦争の「大義名分」を一応認めるとしても，戦争に対する個人的な対応の上でも彼は苦境に立たされた．つまり，子供の時以来これまで直接の関係も深く，今また現実に居住しているこの中立国たるスイス，殊にドイツ語圏スイスは，ヘッセにとって言わば第二の故国になっているのだが，彼はまだドイツ国籍にあり，その点からでも，心情的に彼は初め完全にドイツ側に立っていた．しかし本質的な意味においては常に平和を求める者であったヘッセは，祖国ドイツを心から愛するが故に，また多くの人々が陥る盲目的愛国主義はその最も憎むところであった．彼が自己の執るべき態度をよく考えた上で，開戦直後からドイツの敗戦後にかけて長期間引き続き，敵国にいるドイツ人の戦争捕虜や民間抑留者たちに対して精神的な糧を供給する仕事を進んで引き受けたことは，一般によく知られているが，彼は実に驚くべく献身的に，すべてを犠牲に供してこの仕事に没頭したのであった．その姿は痛ましいばかりで，このため彼にはほっと息をつく時間も殆んど無い程となり，もちろん自分自身の本来の文学的活動にとっては，余裕は時間的にも気分的にもすっかり無くなってしまった．

ヘッセは戦時中，前述の勤務の過重負担と自己の肉体的ならびに精神的な病気との間で苦しみ続けた．経済上の問題も見過ごすことが出来ない．彼は1919年の終りまで続くあの犠牲的な労役に対しては金銭の支払いを全く受けておらず，収入源の一切を殆んど絶たれてしまったその家計の逼迫は言うまでもないことである．他方この仕事による彼本来の世界の荒廃は，戦争の後半にはいる頃から漸く，次第にその耐えがたさの度合を強め

ていくようにもなった．既に1916年暮れのヘッセの手紙によると，詩を作ったり歌を歌ったりすることは彼にとって，戦闘に勝利をおさめたり多額の金を赤十字に寄付したりするよりも，単に素晴らしいことであるばかりではなく，また比較を絶して賢明で，大きな価値を持つもののように思われることも再々であった．こうしてヘッセはやがてまた，かつての日の如く，精神的な美しい領域の事柄に静かに従事し，本を読んだり書いたり出来るようになることを願った．この憧れの気持は次第に強まる一方で，それは遂には病的なまでの高まりを見せるようになっていったのである．ヘッセが何とか自由な時間を求めて絵を描き始めたのは，ちょうどこういう時期であった．そして程なく，彼の勤務外の時間は殆んど全く水彩画とスケッチの制作で充たされるようになった．

戦争の推移に従って，この戦争に対するヘッセの懐疑の念は漸く強まっていった．敵・味方を問わず交戦国のすべては，何という狂気に取りつかれていることだろう．堕落したのは現実のドイツの姿ばかりではない．たとえばイギリスなども，魂を失った資本主義に今やすっかり毒されて，そこには高邁な理想はもはや，そのかけらも見られない．人類全体に対する深い義務感情はどこにも存在しないのである．このようなものに早晩破局が訪れるのは，必然的と言わねばならない．ヘッセ自身の見解によれば，或る国民が世界においてその尊敬を得るのは，普遍的な人類の理想に対する義務をその国民がよく果たしうることを，他に広く認められてこそなのである．そしてこうした反戦感情の高まりの行きつく所，やがてヘッセは，戦争の初期には自ら否定していた兵役忌避者たちに対しても理解を示し，その存在をむしろ現代の何にも増して称揚すべき徴候だとまで思うに到った．そして彼は，戦争の無意味さと愚劣さを骨身にしみて痛感した．

思えば Politik とヘッセとの最初のかかわりは，彼自身が早くから幾度となく政治やジャーナリズムの世界に対して強い嫌悪を見せているところからも分かるように，やむを得ない形で，しかも極く限られた範囲でだ

け持たれたものであった．大戦前のことになるが，それは言わば，ヴィルヘルム２世を頂点に立てたプロイセンの支配的地位に対する，南ドイツ的な防衛的な自己主張の要求とも見ることが出来る．だがそれなら戦争の経過は，ヘッセをいわゆる政治化の方向に推し進めていったかと言うと，実は決してそうではなかったことが注目される．1917年８月にロマン・ロランに宛てた彼自身の手紙にも記されているとおり，政治的な事柄に積極的に関わっていこうというような試みは，所詮ヘッセには体質的にもそぐわないことであった．またもしそうでなければ，時代と社会環境の変転や道義的な理念に極度に敏感な彼自身，疾くの昔に革命家になっていたことであろう．ヘッセが信頼を置いているのはヨーロッパではなく，世界の人間全体である．そして彼は，この地球上におけるすべての民族が関与する「魂の国」(das Reich der Seele) を打ち樹てることを，悲願とした．そこでは我欲を伴わない献身，我執に縛られない愛が特に求められるのだが，この魂の国の最も高貴な具体化をヘッセは，ヨーロッパが古いアジアの文化に負うていると考えた．このようにして戦争は彼に対し，人間の内面の世界への歩みをこそ崇高な活動として受けとめることが，何よりも肝要であると深く自覚せしめた．ヘッセには，戦時下の限り無くいとわしい数々の事柄を超えて，純粋に精神的な行為に没入したいという憧れが次第に強まっていきつつあったが，それはやがて彼に自分自身の心の世界との対決を迫り，内面的な思索をひたすら深めさせていくことになった．ヘッセにはこの道こそ，市民社会のあらゆる理想にも増して神聖なものと考えられたのであった．

ここで翻って，以上の間におけるヘッセの具体的な個人的生活環境はどうかと言うと，大戦終結の1918年の時点で回顧すれば，1904年以来の10余年間にまたがる結婚生活において，彼は当事者以外には到底うかがい知れないような極度の苦難をなめてきた．その間にあってヘッセの歩む道が戦争の勃発以来，特におよそ1915年頃から著しく変化してしまったことにつ

いては，既に述べたとおりである．（ヘッセはこれを，自分本来のアレマン人的な——alemannisch——精神に基づくものだと言っている．alemannisch の名を冠せられるべき民族性と言語と文化との自然的な統一体は，チューリヒとコンスタンツから遠くシュヴァーベン，バーデン，エルザス各地方にまで達して国際的な一大領域を形成しているが，その精神とはヘッセによれば，本質的に非政治的で非好戦的なものなのである．彼が当時の転身の覚悟を，われわれは今こそ新しい方向を選び取ってわれわれ自身の変革を計らねばならないと語り，心の浄化と試練のために内面への道を，また来たるべき平和の仕事に対する協力への準備のために外界への道をも同時に進んでいかねばならないと述べているのは，まさにこの精神の高邁な表われと言ってよいであろう．）

終戦前後の数か月間は，それまでのヘッセ夫妻の結婚生活の中でも最悪のものと言えるようである．当時の彼は，考えうる限りの最もひどい孤立の情況に置かれていた．夫人との間は，今やもうどうにもならない所にまで来てしまっている．1919年の夏にヘッセが或る友人に宛てて記している文面を見ると，どうしても必要ということにならない限りは，事を荒立てて，その結果彼女を死に追いやってしまうようなことだけは決してしない積もりだという．ヘッセは，彼女をもはや全く愛していないからこそ，そのような暴力的な行為に及ぶことはますます不可能になってしまった，とまで述べているのである．いずれにせよ，ヘッセの離婚の意志は固い．しかも離婚の法的手続きにまでまだ到らせ得ないことから来る焦燥感はひどく，法的処置を完了させることによって自分の生活に再び安定した形が取り戻せることを，彼は心から望んだ．

こうしてさまざまな面で重大な危機に直面させられた彼が，今後また文学の世界に立ち戻るとすれば，それはこれまでとは全く違った内心の要請に応じるべきものであるのは当然のことであろう．作家が愛を注ぐ対象は世間（Publikum）ではなくて，人間（Menschheit）でなければならな

い．そしてこのような新しい眺望を得たヘッセにとって，当時のヨーロッパに起こった芸術上の表現主義運動は，非常に重要な変化を意味するものであると思われた．若い世代の大袈裟な表現の中にも精神の生き生きとした動きを認めて，これをよく評価したのである．それはヘッセの眼から見れば，決して美しいものとは言えない．そして彼は，青年の一部に見られる革命的な叫び声を余り真剣に受け取り過ぎてはならないとしつつも，ただその叫び声の中に，時代に応じた新しい憂慮や感情に対する，新しい適切な表現を見いだしていこうとする強い欲求だけは，これをよく感じ取った上で，重大なものとして充分評価すべきであると考えた．時代の徴候であるノイローゼは，それを徹底して体験しつくすことによってこそ，その真の治癒も将来の結実も生まれるのではないか．ヘッセにとっても，彼自身の新しい表現は彼自身の中から，或る必然性をもって生まれてくるのだということを知らねばならなかった．

繰り返し述べてきたように，ヘッセ自身は常に変ることなく，自分は全く非政治的（unpolitisch）だと語っているが，実は倫理的な意味においては少なからず「政治的」な方向を示したことは力説される必要がある．そしてドイツ敗戦の前後のヘッセにとっては，ドイツ国民がこれまで国家の権力への盲目的服従にどれほど深くのめりこんできたか，またこの弱点が権力指向者たちによっていかに徹底的に利用されてきたか，それを検討していくことこそ彼の今後の作家としての課題であると思われた．勿論ゲーテやカントなどに代表されるドイツ・ヒューマニズムに寄せるヘッセの信頼感は揺がず，以前にも増してむしろ更に鞏固なものになっていたことは言うまでもない．こうした状態にあって，1919年に友人たちに宛てたヘッセ自身の手紙の言葉には甚だ含蓄がある．すなわち大衆や，彼がディレッタント或いは立身出世主義者（Streber）と呼んでいる者たちから彼を区別する唯一のものは，どのような種類の仕事や職務に，頭脳と前歴によって自分が運命づけられているかを彼がよく自覚しているということであ

り，従ってまた彼がこの仕事や職務に，出来る限り精神集中して立ち向かおうとつとめたことであった．戦後の今こそ，人々は自ら進んで魂の国に参画し，額に汗して仕事に励むべきであるのに，一向にそのような気配は見えない．労働者も学者も作家も，これまで進んで示した国家や皇帝への忠誠から完全に宗旨変えをして今度は「デモクラシー」のために，彼らの隣人たちにこれまでと同じような熱心さで，ただただ「理性」と「政治」を説教するという仕事に打ちこんでいるだけである．ヘッセは，ドイツの知識階級における政治的な未成熟さに嘆息せざるを得ない．今こそ偉大な模範として追い求められるべきものは，ドイツ国民の運命と苦難を積極的にわが身に受けとめ，肯定的に体験しとおすことによってこれを克服することの出来た，過去の光輝ある数多の先達のありかたである．既に起こってしまったことは静かに受け入れ，それに対する罪を他人に帰するのではなくて進んでわが身に負い，そして運命を肯定することこそ必要なのである．こうしてヘッセの果たすべき課題は専ら精神の領域にこそあり，いわゆる実践の場，つまり政治の側にはないことが更めて確認されたのであった．

こうした立場を踏まえていま再び文学の世界に復帰した彼は，自分がこれから表現しようと目指しているものは，部分的には，これまでにまだ全然表現されなかったような事柄であると，或る自負をこめて語った．だがそうだからといって，ヘッセが以前の自分の作品とまるで関わりを持ちたくないなどと考えているわけでは決してない．それはその在るがままにしておきたいと思うのである．その作品が「青春小説」としても従来愛読されてきたヘッセの，自己の「青春」に対する考えかたがここによく表われている．彼はそれまでの自らの文学活動を振り返って，自分は半生を青春時代に対する不毛の郷愁のうちに過ごし，その意味で実際，ドイツ特有の感傷性に少なからず手をかしてきたことは否めないと述べている．そして彼には或る日を境にして，この糸を今後も紡ぎ続けることが不可能になっ

たのである．ヘッセはこれまでとはまるで異なった道を歩かねばならない．だがまたそのことによって，遙かな美しい青春はその魅惑を何一つ無くしはしないのだ．

ヘッセの今なしつつある創作の活動が，彼の従来のそれに比較して，より多く価値があるのかどうか彼には全く分からない．彼が知っているのはただ，それにも拘らずこれを自分が行なわねばならないということだけである．以前の自分の作品の中に，過小評価してもなお少々は音楽と言葉の文化とが秘められていたことを，彼はもちろん心得ている．しかしこれまで彼が，その時々の自分の力に見合った素材だけを用いて Unterhaltungsliteratur を作るのに満足していたということは，今の彼の立場からすれば，まことに残念なことであったように思われる時もある．そしてここで考えてみると，実は自分がかつてはそのように満足していたということを明確に認識するのに，ヘッセは戦争を初めとして，これまでわが身に背負ってきたすべての苦難を必要としたわけであった．そして彼は，わが身のこのような急激な変化によって，自分の書いた，少なくとも今後新しく出版される本の購買層が，急速に極度に薄くなるであろうと予測した．しかしそのことは，現在の彼にはもうどうでもよいことと思われた．今やこうして，将来の成果を約束する最初の素晴らしい徴候として，*Demian* から *Klingsors letzter Sommer* に至るまでの作品を制作する基盤となった作家ヘッセの，人間としての重大な変革が生まれたわけである．

ところで以上においてその内容を追ってきたヘッセの書簡集については，1973年9月28日付の *Die Zeit* 紙上で文芸評論家の Marcel Reich-Ranicki が，*Unser lieber Steppenwolf* と題して興味ある書評を行なっている．拙稿の締め括りをつける意味で，ここで最後に，この書評のうち特に私にとって問題となりうるところに若干触れ，読者の参考に供することにしたいと思う．実はその評言にはかなり手きびしい批判の言葉もまじっ

ていて，筆者としてはにわかに賛成しがたい所も少なくないが，頁数の関係からも，今はこれに対する直接の反駁は控えて，この場では紹介の域を極力出ないようにしておこうと思う．その大意はおよそ次のとおりである．——

ヘッセは書簡集の中で，極めて多岐にわたる一般的な問題についてかなり詳細に意見を述べている．その対象は現代史的なもの，道徳的や文学的なもの，音楽や精神分析，愛憎，ドイツ人，国家主義ならびに戦争というふうに甚だ広い範囲にまたがっているが，そこには多くの尤もな正しい事柄が含まれていて，しばしば傾聴に価する．その心意たるやよしだが，これに比較して機智には欠けるところがあると言うのが，まずはライヒ・ラニツキーの感想である．手紙の中のヘッセの言葉が，得てして月並みで紋切り型の印象を与えがちなのは，部分的には彼の用いる語彙にも基づくのかも知れない．例えばそこでは „Menschliches“, „Menschheit“, „Menschentum“ などの概念が繰り返し問題にされる．またとりわけ „Seele“ という語も頻繁に口にされているが，このかなり使い古された言葉には，ともすれば評者に拒否的な反応を惹起しがちな要因が含まれている．いずれにせよ，ここではウィットやエスプリに対する期待は殆んど報われないだろうし，都会風な洗練を求めるのもまず無駄である．すべてはかなり素朴な捉えかたをされていて，また視野も広いとは言いがたい．

手紙の内容ならびに表現という点から見ると，長年の間にヘッセは極く僅かな程度にしか発展の跡を示していないのではなかろうか．すでに18・9歳にして彼の手紙は，それから4半世紀後に書かれたそれと殆んど同様の表現や調子にまで達している．そこには既に早々と，ヘッセの書簡或いは作品の全体に支配的な，見解や気分が明確に浮かび出ているのである．これはつまりヘッセの驚くべき早熟さと言うべきか．それともまた或いはヘッセが，まだ充分に成熟していない若者の執りがちな，大人の汚れた世

界に対する反抗的な夢想家的な心的態度を，もしかしたら中年に到っても，完全に克服することは決して出来なかったということでもあるのか．多分その両方とも事実であるように思われる．いずれにせよこれらの手紙には，ヘッセの小説の特別な魅力となっているあの基本的な対立物，つまり円熟の域に達して殆んど老練と言ってよいほどの引き締まった文体と，思い惑うことを知らない点で思春期的な特徴を具えた主題との対比が，見紛うかたなく表われているのである．

ヘッセの言わば開拓者精神は，その殆んどすべての作品に感じ取ることが出来るものだが，それが政治に対する彼の態度をも決定した．彼の作品の主人公たちは近代文明に対し，或いは強い嫌悪を懐き或いはまた絶望して背を向けているが，この文明蔑視は，政治は極度に厭うべき必要悪であるというヘッセの考えかたによく照応している．彼がジャーナリズムに超然として，「政治の悪」に終始手を染めなかったことが，ヴィルヘルム2世時代から第2次世界大戦時に至るまで，多少の紆余曲折はありつつも，結局はドイツの読者の大部分からよく理解と共感を得ることを可能にしたのである．

ヘッセの作品が過去において大変な読者数を獲得していたとすれば，それは極度に異なった志向を持つさまざまな読者を，自分の作品に対して等しく同意させ一致させる才を彼が身につけていたからである．と言うのも，その小説の中には常に二つの要素が同時に見いだせるということで，つまり一方では彼は汚れた現実に背を向け，政治を拒否し，市民的生活にはげしい批判の鋒先を向けているが，また他方ではこれと逆に，単に「高貴な単純と静かな偉大」への憧ればかりか，また堅実な市民的秩序に対する憧れも，結局はその作品の中に共存している．人生の孤独な局外者と共に，また慎しく生きる庶民や俗人たちも，軽侮を受けるでもなければ幻滅を味わわされるのでもなく，ヘッセの世界では温かくその生きる場を与えられているのである．

同時にこの書簡集は，第1次大戦が，ヘッセの世界観・人生観を多くの点において変えたにせよ，すべての政治に対する彼の反発には遂に影響を与え得なかったことを，われわれに示してくれる．ヘッセは，Politik は党派を求め Menschlichkeit は党派を禁じると言っているが，しかし人道主義的感情は，一体どうして或る党派に与することと相容れないと言うのか．そしてまた人間性と政治という対立概念の設定は，本来あまりに素朴で偏狭な態度でもあり過ぎるが，しかしこのアンチテーゼの設定を正しいとしたヘッセの手紙の日付けが，ちょうど大戦終結時の1918年11月であったことを考えれば，彼の発言の執拗さも納得がいくとは言える．

第1次大戦中のヘッセの平和主義的な態度は，これまでしばしば絶賛されてきた．たしかにそれは本質的に見て，模範的の名に価するものであると思われる．しかし大多数の人々が言うほど，戦争というものについてのヘッセの意見は，疑問の余地が無く明白であると言えるものではなかった．Montagnola の Gandhi などとしばしば称されてきたヘッセもやはり，当時における殆んどすべての ヨーロッパ人 と或る意味では似たような，戦争に関する空疎な決まり文句を一時期は書き得たということは，やはり記しておく必要がある．

ドイツ的感傷性に対するヘッセの訣別の決意表明は，文字どおり真剣なものであった．しかしこの特性への傾きは，或いは彼の後期の作品のいくつかのものにもまた見られないであろうか．ヘッセの小説には，後世にも当然残るべくして残った価値ある作品が含まれていることは言うまでもないが，しかし或る種のヘッセ神話に訣別すべき時期はもう疾くに来ているのである．

以上のライヒ・ラニツキーの見解は，最初にも断ったとおり，私の「紹介」の範囲を原則として出ていない．ただし言うまでもなく，かなりの分量に及ぶ彼の書評全体の「忠実な」跡付けはむしろ避け，これは多少主観

的な彩色も加えた解説のようなものと考えられたい．そしてこの部分に先立って私が行なったヘッセの書簡集自体への紹介の内容が，何らかの程度において，ライヒ・ラニツキーによって代表されるヘッセ見解への，論評の形式を取らぬ或る論評の役割も果たしていてくれたら，これは全くの僥倖と言えるものである．